

# 会報 234

## 目次

佐々木宏幹先生を偲ぶ	1
自著紹介『小田川流域の生物分化多様性』	1
研究発表要旨	3
新刊紹介	7
学会記事	8

## 佐々木宏幹先生を偲ぶ

加藤 正春

我が国のシャーマニズム研究の第一人者、佐々木宏幹先生が2024年2月26日にお亡くなりになられた。93歳のご長寿であった。前年9月に出版されたご著書『仏教人類学の諸相』（仏教企画刊）には、<sup>おぼろ</sup>絡子を掛けられた若々しい先生のスナップ写真が掲載されていたので、まだまだお元気なものと思い込んでいた。先生の訃報は残念である。

私は1977年から駒澤大学大学院で学んだが、その頃の先生は、学位論文『シャーマニズムの人類学』（1984年に弘文堂から刊行）の執筆と、シャーマニズム理論の深化に全力を傾けられていた。一方、大学院には桜井徳太郎先生もおられて、奄美沖縄と東アジアのシャーマニズム研究に精力的に乗り出されていた。大学院の授業や駒澤宗教学研究会などの例会でシャーマニズムが議論され、多くの研究者が出入りして、当時の大学院は日本のシャーマニズム研究の拠点となっていた。そのなかで学んだ私は、シャーマニズム研究には向かわなかったが、先生の授業やご研究に日々接するなかで、佐々木シャーマニズム理論の精髓を肌で学びとることができたように思われる。それは私の視野を広げ、その後の研究の財産となった。

先生は、駒澤大学を退職後も、宗教人類学者・仏教人類学者として多くのご研究を著された。最晩年には、現代日本の宗教状況に対する

穏やかで、的確な批評も試みられておられる。冒頭に記した『仏教人類学の諸相』には、さらに幼時の故郷の生活なども記されており、先生のお人柄が偲ばれるようである。先生は幼い頃にご両親を失い、祖父のお寺で育てられたが、七七日忌にはそちらにご分骨もされて

いる。また、先生の眠る世田谷区北沢の永正寺と、先生に縁の相模原の日庭寺に「佐々木宏幹文庫」が設けられる予定であるという。

最後まで研究者として過ごされた先生のご生涯を思うとき、そのご業績を私なりに受け継いで、研究を続けていきたいと思う。

## 自著紹介『小田川流域の生物文化多様性』

田賀 辰也

本書は、岡山県南西部をほぼ東西方向に流れる小田川流域に暮らす私が、子供のころから現在までに経験してきたことや見聞きしたこと、年配者から聞き取ったことを、多くの史料を交えて紹介したものである。その地域で暮らす当事者としての筆者が地域内のみならず地域外の人や次代を生きる子供たちに伝えたいと思うこ



最後のご著書『  
仏教人類学の諸相』

本書は、折口の生い立ちから柳田國男との出会い、民俗採訪の旅、そしてその旅の体験から生まれた独特の折口術語の解説を行っており、折口信夫の生涯と思索を辿りながら読者も共に古代と現代を結ぶ時空を超えた旅をしている感覚になる。

明治の末に折口が柳田國男の「民間伝承」論と出会い、それを自らの言葉で「生活の古典」と表現した。そして柳田の著作に影響を受け、沖縄採訪の旅や「新野の雪祭り」・「奥三河の花祭り」などの三遠南信地域の祭りを探訪したことで、「まれびと論」や芸能における「鬼」、「翁」、「もどき」などを「発見」し、いわゆる「折口学」を樹立していった過程を、折口の膨大な著作と『折口信夫全集』第31巻に収めら

れている「自選年譜」等の資料を使って時系列に整理しその背景についても言及している。

全体の構成は、第一章「生活の古典」の発見と「折口学」、第二章 折口信夫・釋迢空のまなざし、第三章 柳田國男との出会いから「古代研究」へ、第四章 民俗採訪の旅、第五章 折口術語と文化理論である。特に第五章は、しばしば難解と評される「<sup>よりしろ</sup>依代」や「まれびと」などの「折口術語」と折口が提示した文化理論を分かりやすく概説している。「折口学入門書」と呼ぶのは失礼かも知れないが、本書はこれから民俗学を志す若い学生たちにとっても、折口学への良き道しるべとなる一冊であろう。

(大倉寿仁)

---

## 岡山民俗学会会報 234号

2024年9月25日

編集・発行 岡山民俗学会

代表者 小嶋博巳

事務局 〒700-0089 岡山市北区津島本町16-5-3

電子メール okayama.minzoku.gakkai@gmail.com